

比較家族史学会第28回研究大会

比較家族史学会は福岡市女性センターのアミカスにおいて10月20日～21日の両日開催され、昨年秋の大会に引き続き「女性史・女性学の現状と課題」をテーマとして活発な研究報告が行われた。研究報告は、明治中期の主婦像や娼妓解放令公布をめぐるものであり、シンポジウムは「近代女性史・女性学と高群逸枝」にかかわるもので、まさに女性史に彩られた大会であった。そうした中で、自由報告として山田昌弘会員(東京学芸大学)による「男に介護が出来るか—高齢者介護の課題」と題する報告は、介護作業という具体的に身体的接触を伴う労働分野において、介護者が女性であるか男性であるかによる好悪感情の現状を明らかにしており、日本社会のジェンダーの現状のある側面を示すものであるとともに、今後の高齢介護労働への示唆を含めて、興味深いものであった。

(渡邊吉利記)

日本精神衛生学会第11回大会

日本精神衛生学会の第11回大会が11月10日(金)と11日(土)の2日間、石川県教育自治会館(開催校は北陸学院短期大学)において開催された。大会シンポジウムのひとつとして下記の「少子化社会とメンタルヘルス」がとりあげられ、筆者は「人口学からみた少子化問題」のタイトルで特別講演を行うとともにシンポジウムのパネリストの一人としても参加した。

シンポジウム「少子化社会とメンタルヘルス」のコーディネーター・司会 金子 勲栄(金沢大学教育学部教授)
シンポジスト 阿藤 誠
依田 明(横浜国立大学教育学部教授)
橋 伸子(石川県厚生部児童家庭課)
岡本 祐子(広島大学教育学部助教授)

阿藤は特別講演において、欧米諸国と比較しつつ日本の出生率低下の現状、人口学的、社会経済的背景、影響、対応について全般的に論じ、これを承けてシンポジウムにおいては、依田が「少子家族のメンタルヘルス」、橋が「石川県における子育て環境づくりの推進」、岡本が「少子化社会における女性の発達とメンタルヘルス—アイデンティティ論の立場から」の小報告を行い、少子化問題のミクロ的側面—特に子供と女性—に焦点を当てて活発な討論が行われた。

(阿藤 誠記)

第6回アジア社会学会議

第6回アジア社会学会議は、1995年11月2日～5日にかけて、北京で開催された。アジアの15ヶ国と地域から、200名余りの社会学者が集まり、「21世紀におけるアジア社会と社会学」というテーマをめぐって学術交流がなされた。

中国社会科学院と中国社会学会とが支援団体となり、中国各地からの参加、そして日本からも60名ほどの出席があり、大盛会であった。1953年にほうむられ、79年3月に復活するまで中国から社会学がブルジュア学として批判され消えていた時代を考えると、16年目にこれだけの国際会議が開ける力量をつけてきたことに感激しないわけにはいかない。

会議最終日には、次の様な決議がなされ、改めてその意義が確認された。

1. アジア社会学は歴史上かつてないすばらしい発展の機会に恵まれている。…
2. 21世紀におけるアジアの社会学者の主な任務は、アジア社会の現実から出発し、アジアの社会発展、社会変動の内的法則を整理し、21世紀におけるアジア社会学の新しいモデルを模索・創立することである。…